

岡山晴彦作

綺羅の鼓

枯野譚

登場人物 (一幕四場) 早春から秋へ

石井公彦	愛育院の教師
冬乃	戦争の孤児
磐井の君	筑紫の国造
枯野姫	大樹の精
有明	海の精
葛子	磐井の息
その他	
愛育院の子供たち	
黒い影	

幕前

\*破衣の僧姿をした公彦が立つ、風で衣の袖が翻る。

公彦 私がかつて僧であったか、いや教師であったか、学者であったか、いや実業家であったやうな気もする、今になっては思い出すこともない。それはきょう日どうでもいいことだ。半世紀のあいだ、他国で過ごしてきて、大樹のもとに戻ってきた。

なにもでもないおのれがここにいて、これで十分だ。 [暫く瞑目]

秋も深い、枯れ薊の折れ伏すときの風であろうか。今それが私に、さやかな思いを運んできてくれる。花冠にしたいような野紺菊も咲いている。

「あらむらむ この世のほかの思ひ出に 今ひとたびの逢ふこともがな」あのとき冬乃が呟いた歌。それから一度会ったのが最後であった。 (和泉式部一)

\*「鼓」の音、しばらく鳴り続ける。

昭和二十年の公彦と冬乃の姿が影となって浮かび上がり、間もなく消えてゆく。

## 第一場

\*古代の筑紫の地、早春の頃。中央に大樟が茂る、根方は洞。前に泉が湧く。上手に小振りて芽吹き前の楓。大樹の精（枯野姫）、有明、不知火の海の精の童女が戯れる。

「鼓」がゆつくり鳴り、やがて消える。

有明 今朝の風は疾かった。まだ北風残っている、夜の明けぬ前着きました。 「空の雲を指す」

不知火 姫様、風の雲から見えました、今日もあの方が来られます。 「泉を指差す」

枯野 いつも狩りの途中で泉に寄り、喉の渴きをいやされる。またあのお姿を垣間見る。ときめ

きは風光るせいかしら。

有明 魚が薄氷から躍り出る心地。

不知火 姫様の心うちは春の鹿のよう。

枯野 これ、抑揄わないで、わたくしは千年生きた大樹の精、人ではないのですよ。あなたたち

もこの楓の精になつたら。 「手で打つ仕草」

有明 でも知っています、姫様のときめきは眩しいくらい。あれあれお出でになりましたよ。

\*狩衣姿の磐井の君が登場、手に弓と菜の花を持つ。枯野が大樹の洞に、二人は樹の後ろに隠れる。

磐井が屈み、泉の水を掌に掬おうとして止める。

磐井 あやし、水面に映るのは誰だ。 「劍の柄に手を掛ける」

\*枯野が大樹の洞から出てくる。

枯野 怪しい者ではありません。どうぞこの土器にて召されませ。 「器を差し出す」

磐井 これは思わぬ心配りを。余は筑紫の国主の息で磐井と申すもの。そなたは。

枯野 わたくしは枯野と申します。この樹の畔に住まいます。

磐井 ついぞこの辺りでは家は見かけぬが、まあ良い。いつも狩の途中でここに立ち寄り、喉を潤すことにしている。

枯野 知っております。いつも凛々しいお姿、樹の陰から窺っております。

有明 姫様は若様の前では鶯の初音、たどたどしう囀られます。

不知火 若様は美しい春の鳥、樹に止まられるのを姫様は心待ち。

枯野 これご無礼でありましょう。申し訳ございません。まだ幼き童女とて物事を弁えず、お

許し下さいませ。 「頭を下げる」

磐井 いや、いや、こちらこそ。無骨な武人として、思い掛けぬことで失礼を仕った。ではお言葉に甘えて。 「水を汲み、喉を潤す」

枯野 またお立ち寄り下さいませ、必ずお待ち申し上げます程に。

磐井 今日は忝 かった、甘露であった。これより先を急ぐ、また会おうぞ。 「器を返す」

礼じや。野の恵みを受けよ、国ではまだ珍しき菜の花ぞ。 「花を枯野に渡す」

枯野 春の先触れ、言い伝えに、菜の花化して蝶になるとか。いつか、あなた様のみ許に舞いま

しよう。「花を、抱き締める」  
（古代に中国より渡来植物一）  
磐井 さらばじや。

枯野 お言葉がかげろうて消えませぬよう、その剣が望みを断つ無情の剣でないよう、きつと縁の糸をわたくしの心につなぎ止めておきましょう。

\*再び「鼓」がゆつくり鳴り、やがて消える。

\*昭和二十年、晩春の夕方。背景に九州N市の孤児院「愛育院」の建物。正面の庭は前場と同じ大樹の景、楓は若葉。大樹の脇にベンチ、下手に奉安殿。公彦が腰掛け眠る。左手を失い隻腕。

冬乃が登場、近寄り声を掛ける。（天皇の御真影（写真）や教育勅語を安置する小さな建物二）

冬乃 先生、先生。

\*公彦が眠りから覚める。

冬乃 今頃は花冷えとも言いましょう。戦争中だからお医者様だって少ないの、風邪を引かないよう気を付けなくちゃ。

公彦 ああ、吃驚した。でもありがとう、親切に気を遣ってもらって。いつのまにか夢を見ていた。ところで君は誰、僕は君を知らない。

冬乃 だって先生、夕方になるとこの樹の下で物思いに耽るか、うたた寝しているんですもの。公彦 僕がここにいるのは、よく言うでしょう。この季節の物思いは春の愁い、うたた寝は蛙に目を借りられたから。君はいつも僕を見ていたの。

冬乃 わたしには見えるの、先生が。ずっと前から見えているの。 「顔を近付ける」

公彦 じゃ、あなたは僕の目を借りたんだ。君はいつから。

冬乃 この愛育院に一週間前から来たの。もう大人だから、院長先生のところにお世話になってるの。

公彦 まあここにお座りなさい。

冬乃 では失礼します。

\*二人が並んで腰掛ける。

公彦 僕は石井公彦、君のお名前は。

冬乃 わたしのこと冬乃と呼んで。

公彦 ご両親はいないの。

冬乃 ううん、良く知らない。東京で空襲にあつて亡くなったみたい。

公彦 良く分からないの。

冬乃 全然前のこと覚えていないの、さっきの名前だつてうろ覚え、本当の名前かどうかは分からない。何もかも臍、春の闇の中に見えるみたい。お家のことも、お父さんお母さんも、思い出すのは、赤い炎と焼けた土だけ。それも蜃気楼のように遠く儂い。

でもいいの、先生に会えたから。

公彦 それは、どうも。でもよほど怖かったんだね。

冬乃 先生にも聞いていい、でも悪いかな。

公彦 いいよ、この腕のこと。気にしなくてもいいんだよ。

冬乃 うん、でもやっぱりいい。身体からだのこと聞くななんて悪いもの。

公彦 僕は従軍していた。前線でこの左腕に敵の弾たまを受け、止むなく手術で切り落とした、そして残念なことに生き残った。 「右腕を上げる」

冬乃 残念なことに。

公彦 そうだ、部下は皆死なせてしまった。なぜか僕だけが生き残った。

冬乃 「立ち上がり、手を広げ」 だから鷹が鳩になったわけ。でも春は龍が天に登るとも言うわ、元氣を出して下さいな。先生はどうしてここに。

公彦 内地に帰還し、戦傷者の仕事として、大学の紹介でこの愛育院に赴任した。まだ新米しんまいのほやほやだ。

冬乃 わたしは年は分からない。十七歳位かな、でも先生のごことは全部知ってる。大学中途で軍に志願、小隊を率い、偵察ていさつの途中敵と交戦し、隊は全滅ぜんめつした。年齢は二十二歳になったばかり。

公彦 なぜ君は僕のこれまでを知っている。

冬乃 なぜだか分からない。でもあなたのごことは全部見えるの、自然と言葉が出てくるの。

公彦 不思議な人だ。

冬乃 今どんな夢を見ていたの。

公彦 遠い古の夢だった。大樹の精という女人にょじんが出てきた。二人の童女どうじょを連れていた。

冬乃 「少し妬ましげに」 きれいな方。

公彦 樹の香りのする女ひと、月光をまもっているような、でもどこか悲しげだった。

冬乃 夢に匂いがあるのかな。 「大樹の匂いをかぐ」

\* 軽やかな「鼓」の音、やがて消える。

冬乃 そう言えば木肌の匂いがある。鼓動こどうが聞こえるような気がする、根っ子が水を飲んでいるのかな。

公彦 風のせいかな、それとも月のせいかな。

冬乃 月の光という曲、昔ピアノで弾いたような気がする。ドビュッシーかな。 「弾く仕草」

公彦 月光という曲もある。でも君には月の光の曲の方が似つかわしい。

冬乃 「踊るように」 そろそろ戻らなくちゃ。楓の若葉が寒そうにしている。こんな戦いくさのときだって、風も雨も雲も変わらないわ。木の芽時こばやしになり、弥生やよいが過ぎて、清明せいめいの気が漲みなって、穀

雨が降り、八十八夜を数えて、春が尽きる、もうすぐ夏。

公彦 「立ち上がり乍ら」 季節のこと、よく知っているんだね。

冬乃 「活発な口調で」 学校のこと、何にも憶えていないけど、国語は得意だったみたい。四季

の言葉は忘れていないわ。

公彦　こんなところで安穩あんのんとして、気が咎めない訳でもないが、夢のせいかな、いや君に会ったせ  
いかな。柄にもなく今宵は楽しかった。今晚また空襲があるかも知れない、気を付けてお帰り。

## 第二場

\*古代。中央に小川、兩岸に磐井の君と枯野姫が立つ。枯野側の川のほとりに小木あり、枝に綺羅の鼓が掛かる。

磐井　枯野よ、木下閣こしたやみより出よ。帰ってくれ、産土うぶすなの地に。そなたは人ではない、わが筑紫つくしの地の精なのだ。

枯野　わたくしは元々筑紫の湾に立つ大樹たいじゆ。千年の命を経て、魂たましいある精となり君を恋した。若き懐かしい頃であった。

磐井　余の許もとに仕えたい心止まず、自らの身を断ち人に化身けしんした。その幹で船を造り、朝な夕な寒泉しみずを汲み筑紫の湾を渡り、余に捧げた。

枯野　「腕き両手を天に上げ」　わがいのちの籠るその船は、枯野をゆくように走り、枯野からのの船と君は名付けた。

磐井　有明ありわけと不知火しらぬいの海の童女を随えて、壺を抱え、舳立へんげつ姿は忘れられぬ。筑紫路はいま青野、山も滴したるころ、降り注ぐ月は夏の霜、天は清明におわす、早う帰り来や。

「手を差し延べる」

枯野　君とのあいだに授かった葛子くすこ、今息災そくさいにしていましようや。一目会うのも叶わぬ、情けなや。

磐井　あれは生まれ乍らの筑紫の王。そなたと浄めた阿蘇の神火、若楓わかかえでのよう、気高き漢おのことなるであらう。

枯野　「胸を掻きむしり」　わが子に触れるのも叶わぬ、この苦しさ分かって下され。

磐井　余がやんごとなき方に口走った、そなたとの不思議のこと。暫く出仕させよとの言葉、信じたのが余の不覚ふかくであった。「苛立いかだたしく、劍の柄を叩く」

枯野　わが君よ、わたくしは帰れぬ。あの人は恐ろしい方です、私に綺羅きららの鼓の法を掛けた。

「鼓を示す」　(美しい綾織り布一)

磐井　その鼓は元々は平安なる靈界のもの。転変てんぺんの現し世に迷い出れば、怪しき者が操る変化へんげの鼓と化する。あの人は筑紫を領地に欲しく、筑紫の精たるそなたを虜とりこにしている。

枯野　あの方だけが綺羅の鼓を打てる、自在に打って楽しまれる。この身は夏の蝶のように舞い、狂う。

磐井　口惜しや、筑紫が弄もてあそばれる。幼きとき専心せんしんあの人に仕えしに。無残むざんやな、惨い仕打ちぞ

な。蟻地獄か、飛んで灯に入る夏の蛾か。

枯野 このわたくしにも綺羅の鼓を鳴らせれば、帰そうと言われる。だが綺羅といえども布は布、叩けど叩けど、鳴ろう筈もない。

\* 枯野が木の枝から鼓を取る。狂おしく鼓を叩く、鳴らない。枯野が無念の態でそのまま。急に鼓が枯野の手から離れかかる。

枯野 あれ、鼓が引かれる。あの方が鼓を呼んでおられる。

\* 鼓が手から離れ飛んで行く。枯野が追うが諦める。

激しい「鼓」の音、やがて緩やかに、又激しく繰り返す。

枯野 鼓が鳴る。あなたの傍に行きたくとも。「身をよじる」叶わぬ、逆らえぬ。この音、狂おしい、この胸に鼓動が高鳴る。

磐井 何と齒ぎしりする思い。やんごとなき方のありようは、人とも思えぬ、筑紫の精のわが妻を。

枯野 あの方は人ではないのです。生霊いきりたまなのです、誰も鳴らせぬ綺羅の鼓、自在に打てる恐ろしい方です。現し世の人は抗あらがえぬ方です。

\* 「鼓」の音が激しくなり、枯野がよろけ奥に引かれる。

枯野 あれあれ、また呼んでおられる、あなた、あなた。わたくしは人に化身したばかりに、また樹に戻りたい。

\* 枯野が消え掛かる。磐井が錦に包んだ土器の片割れを投げる。

磐井 枯野よ、葛子が余に代わり、筑紫の国主こくしゅに成人するまで待つのだ。それ迄土器かわらけを二つに割り各々持とうぞ。それを一つにして、いのちの水を汲むとき、鼓は霊界へ戻り平安の鼓となる。そのときあの方の手からそなたを取り返し、必ずや筑紫の地に呼び戻そうぞ。

\* 枯野が戻り、土器を拾い胸に抱き締めて消える。

\* 大樹の景、夏、楓は青葉。公彦と冬乃がベンチに座る。

冬乃 先生とわたしはいつもこの樹の下で話す。いつまでこのままにいるの、この三ヶ月の間に何があったの。

公彦 来る日も来る日も、飽きずに何を語り合っただらう。

冬乃 でも先生はいつも上の空、口惜しいくらい。

公彦 いつも死んだ部下のことばかり、走馬燈のように頭を駆け廻っている。生者は死者の夢を見る。汗を滲ませたカーキ色の軍服、軍靴ぐんかを合わせた拳手せんしゅの礼、もうもうと上がる茶色の土埃、泥濘ぬかるみに漬かる軍馬と兵士、輸送船に満載された黒い顔、顔。

冬乃 先生はもう十分ではないの、その貴い左手を国の守護神に捧げた。己のうまし肉体を捧げる、戦いくさの神にとって最高の聖餐せいさんなのです。

公彦 確かに僕は隻腕だ、指揮を執り、銃を取ることもできない。そのくせ心は逸はやってしまう。雄々しい戦の鼓がこの胸に高鳴っている。

\*冬乃が立ち上がり、苛立たしそくに、

冬乃 先生はかつては勇敢な戦士、だけど心を交えることには臆病おくびようです。どうして皆の分も生きようとは思わないの。今あなたの心は隠沼かくのみのよう、一瞬の愛の稲光りにも怯おびえています。

\*暫く沈黙。鋭い「笛」の音が一声鳴る。激しい「鼓」の音が続きやがて止む。

公彦が立ち上がり上着を脱ぐ。冬乃と向かい合う。 (茂った草に隠れた沼二)

公彦 冬乃、この肩を見るがいい。美しいと思うか、醜みにくいと思うのか。僕はこの両の腕で力の限り戦う夢を見る。だが目覚めれば体の半分は空を切っている。

冬乃 今見えたのは夏の羽抜け鳥、やがて豊かな翼に抱かれたお心になる筈。わたしは見たいの、あなたが朝焼けの空に羽ばたく姿を。

公彦 友の亡き魂、私の千早振る心、これは片腕の生贄いけにえだけでは消せない。それは鎮魂の儀式の供物になどならない。依然、荒ぶる戦の鼓が僕の心に鳴っている。 (逸り立つ気三)

冬乃 何度でも言いましょう。あなたは既にその片腕を国に捧げた。あなたの心に宿る鼓、今鳴っているのは戦野の幻影の研こ。

やがてこの国は焦土、廢墟はいきょとなる、だが必ず人の心は荒廢から立ち上がる。だからひと欠けらの愛でも貴いのです。わたしの手でその鼓に、平安の音を響かせてみせます。

\*暫く沈黙。激情収まり、二人とも静かな無言、楓から風鈴の音。

冬乃 誰かが風鈴をこの楓かえでに下げた、無心に鳴っている。白南風しろはなが吹いているのですね、穏やかに夏の月が上ってきます。 (梅雨明けの晴れやかな風四)

\*夜蟬が鳴き始める。

公彦 空は深いはまだ色、空襲があれば案山かかし子も立つまい、炎帝えんていだつて雨乞いの女神だつて隠れてしまう。勝利を信じてでも一抹の黒雲もよぎる。 (夏を司る神五)

「冬乃、樹を撫で、呟く」

冬乃 ” あらざらむ この世のほかの思ひ出に 今ひとたびの逢ふこともがな ”

結び葉が落ちて、夏落葉となる、あなたの夏の匂い、時は迫って来る。清和の日、灼熱しゃくねつの日、出会いと別れ、青葉あおば闇に予感が宿る。

## 第三場

\*古代、泉湧く大樹の景、晩夏。奥に石造りの墳墓。石人、石馬、石盾を並べた石道、正面に石の棺、裂けた鎧と剣を持ち傷ついた磐井の君、綺羅の鼓を持つ枯野姫。

「鼓」がゆっくり鳴り、消える。

磐井 枯野よ、良く来てくれた。

枯野 あなたと戦うため、夏の果てやんごとなき方が軍を起こし、筑紫へ下向するに従ってきました。久方振りでごさいます。懐かしき君、恋しきこの海山、秋寂びるよう齡を重ねたこの身。

磐井 見よ、大樹は甦った。そなたも昔のままだ。竜田姫もかくや、人に化身したときと変わらぬ。(秋を司る女神一)

枯野 かたちではなく心なのです。あの方に思うがままに操られ、黄落するやも知れぬ思い。

磐井 枯野よ、見よ。余はこのように傷つき敗れた。だが魂は決して萎れていない、そなたと会うた時のままだ。余は誇り高き筑紫の国主、この地を守るためやんごとなき方に挑んだ。だが戦況利あらず軍は敗退した。「昂然と胸を張る」

\* 枯野が石道を歩き、奥の墳墓に手を掛ける。

枯野 この墳墓はこれを予期してか。

磐井 石は何も語らぬ、石は身じろがず、世に枯るることはない。筑紫の国主は永遠なのだ。

\* 鎧姿の葛子が従者一人連れ登場。

葛子 父上、無念でありましょう。母上、お懐かしゅうございます。

枯野 何と葛子かや、父上とよう似て、鷹のように凜々しい漢となられた。母も嬉しゅう涙零ちます。

葛子 私は父上の秘命を受け、己の軍は動かさず戦況を見守った。今私が動けばあるいは父上は勝利を、まだ遅きに失するにあらず。ここで起死回生を目指さるや。

磐井 「石盾を撫で」 いや、そなたは動かずとも良い。この度の戦は余の意地、筑紫の国主としての面目じゃ。これだけ戦えば筑紫の力、あの方の身に沁みよう。これより無法の強請は致すまい。

葛子 私に如何せよと言われるのか、やんごとなき方に屈従せよと。

磐井 そなたはあの方と和睦するが良い。余の首を献じるのじや。筑紫の大樹の精を母に持つそなたは、生まれ乍らの筑紫の国主なのだ。相手も決して粗略には扱うまい。今はひたすら忍従のとき。

葛子 父上、それはできない。いやしくも父上は筑紫の王、その子が王の首を取る、やがて世の物笑いになります。

磐井 卑屈になることはない。堂々と父の首を打て、そして筑紫の弥栄をはかれ。龍淵に潜むの伝え思い起こせ。この美し地一旦灰燼に帰そうとも、必ずや悠久のいのちは甦えらう。

\* 間をおき鋭い「笛」の音が一声鳴る。激しい「鼓」の音が続きやがて止む。

磐井 枯野よ、ようやく時が来た。土器を合わせ、余のいのちの寒泉を汲もうぞ。さすれば鼓は靈界に戻りて、平安の鼓となる。二人は大樹の洞に入り、筑紫の精となる。かくして筑紫の地を守らばや。葛子よ、早う首を打て。



\*暗転、戻る。磐井の君の屍が棺の上に置かれる。磐井の霊と鼓を持つ枯野が現れる。

枯野 葛子、わが子よ。母は去ぬる、最後の頼みです。有明と不知火の童女に命じ給え。

まず枯野の船は焼くがよい、その火で海水を炊き、浄き塩を大樹のもとに撒きたまえ。残りし木で琴を作り、高らかに掻き鳴らされよ。その音色は七里に響み、いのちの歌を奏でましよう。

磐井 今ひとつ葛子に頼みがある、余と枯野の土器を一つに合わせ、この大樹の根方に埋めよ。

いのちの寒泉を汲んだ二人、ともに永久のいのちを得られよう。

枯野 後の世に、綺羅の鼓の法に掛かるものあれば、わたくしが人に化身しそれを解き、必ずや

平安の音を齎してみせましよう。妖かしの鼓の音は消えゆこう。

\*二人の霊が、大樹の洞に溶けてゆく。「鼓」がゆっくり、段々激しく鳴りやがて消える。

\*大樹の景、昭和二十年八月。

空襲焦土の日。公彦が愛育院の児童たち五人を連れて来る。

公彦 早くこの樹の下に集まりなさい。冬乃姉さんから頼まれたのです。何があるうと八時までには必ず、肩寄せあつてここに避難するように。

子供 お姉さんは。

公彦 片腕の僕に代わつて、病院に奉仕に行つてくれました。院の大人もみんな行つてしまった。

\*大樟の陰に児童たちを寄せる。

公彦 さあさあ君たちはお姉さんからの大事な預かりもの、だから言うことを聞いて。そう小さな子はその洞へ潜りなさい、大きな子は樹の陰に隠れなさい。

子供 この樹まるで大きな傘みたい。

公彦 「上を仰ぎ見る」 そうだ、大きな緑の傘だね。青い空だ、雲の峰も立っている。みんな

夏の色、まだ蝸牛だつて這っている。あめんぼも黄金虫も青蛙も皆元氣だ。平時なら世はこともなし、だが今は戦のさなかだ。風も死んだように止んでいる。

\*突然閃光が走り、地響きともに土埃が立つ。樹の脇にいた公彦が爆風で倒れる。

院舎が倒れ、火に包まれる。子供たちの悲鳴、だが皆樹の陰にいて助かる。

\*ベールを掛けたような薄暗い場面。破れた服で水筒を肩に掛けた公彦が、よろよろと歩く。

「鼓」がゆっくり鳴り、やがて消える。

公彦 冬乃を訪ねて来たのだ。だが何がどこにあったか、なにも分からぬ、焦土だ。私に代わつて奉仕に行った冬乃。ああ頭が割れそうに痛い。そのことさえ忘れそうだ。

\*黒い動かぬ倒れた影。

公彦 朝風だから漂う匂い。血があるから、灰にもならぬ。焦げている、燻っている。形だけ残る、人になる前のようだ。人は高貴なものとは誰が言った。

「立ち止まる」

公彦 涙も出ぬ、呪いも吐けず、合掌もできず、祈りもできぬ。ただあるのは吐気だけだ。雨だ、せめて黒い煙の雨でなく、緑雨のように滴ってくれ。

\*黒い影が歩いて来る。

公彦 ぼろぼろの人だ、皮膚も服も溶けたのだ。戦では襪褌の旗は名誉の印、だが人の襪褌は悪魔の仕業。悲しみさえ引き攣っている。私はどうしたらいいのだ。

\*黒い影が寄って来る。

影 水を戴けませんか。火傷には良くないのです。でもあの劫火に攫われ、身体から水蒸気が立ち昇る。せめて渴きを潤して死にたいのです。

公彦 「頭を掻きむしる」 分からないのだ。この眼は開いている。でも頭の中は今にも途切れそう。

泉のありかを、水のありかを。どうしたらいいだろう。

\*黒い影が消える。

公彦 かの声には聞き覚えがある、まさか。

\*果然とするなか、突如奉安殿が現れる。公彦が凝視し、狂ったように拳で建物を叩く。

公彦 何と言うことだ。この世の地獄のとき、どうしてこんなものだけが残っている。怒りをどこへぶっつけたらいいんだ。

\*公彦が辺りを見回し、近くにあった大石を見つけ拾い上げる。

\*暫く暗転、古代、泉湧く大樹の景となり、公彦が茫然として立つ。

「豎琴」の低い音色。

公彦 そっくりだ、愛育院の大樹とそっくりだ。だが泉が湧いている。いつか夢に見た樹だ。

\*枯野姫が現れる。

枯野 公彦殿、かつてここにも戦があった、筑紫の国は焦土となった。わたくしはやんごとなき方の召人、そして綺羅の鼓の囚われ人、わが夫はその方と戦い命を絶った。だがその魂は綺羅の鼓を動かし、鼓は平安なる霊界に戻った。そしてわが身は夫と共にいのちが甦った。

公彦 あなたはいつか夢見た姫君、大樹の精ではないか。

\*枯野が冬乃になる。激しい「鼓」の音、急に止む。

冬乃 この国は焦土となった、あなたを動かしていたもの、それは死んだ。わたしもやがて去る、一度だけあなたの心の鼓を鳴らして。

公彦 私は隻腕だ、その腕であなたを抱いた。そして、ひと欠けらの愛も貴いと、あなたは言った。だがそれはいのちあつてこそその言葉なのだ。

\*冬乃が枯野になる。

枯野 冬乃はわが化身、そしてこの大樹の化身、現し世のものではない。あなたがあのとき抱いたのは、転生の不滅の魂なのだ。

\*枯野が冬乃になる。

冬乃 さらに公彦殿、わたしはこの大樹に戻ってゆく。だが現し世の君に、抱かれたのは忘れまい。そして、また巡りあうときまで、あなたは五十の星霜を経ることになりましょう。

\*冬乃が枯野になる。再び「豎琴」の音色。

枯野 夏なれど滾々と冷泉のごと湧く、二人のいのちの寒泉。これにて汲みませ。灼熱の火に焼かれし人に、鉄の破片に傷付きし人に、はたまた怪しき気に冒されし人にも与えたまえ。そして戦の鼓の音も消えてゆくぞ。

\*大樹から土器を取り出し、公彦に与え枯野が消える。

## 第四場

\*古代、泉湧く大樹の景、秋、楓は紅葉。幕前の破衣の僧姿の公彦、大樹の裾に座し瞑目している。

海の精の童女が登場、有明は鼓、不知火は豎琴を持つ。

有明 さても、さても、現し世の方々にご無礼なれど、時のすき間をお借りして、枯野姫様の平安を賀します。

有明 「鼓を叩き、唄い舞う」

” 祝言めでたき秋の興

豊寿ぎ 狂寿ぎ 寿ぎ回り

あやに楽し、ささ楽し

邯鄲 鈴虫 鉦叩、良夜に瓢 初尾花

神酒 献る 畏み、畏み献る ”

不知火 「豎琴を弾き、唄う」

” 大樹より 出てわが君に 仕えまつらん 君恋せば

千年のいのち捧げし 枯野の船よ

朝な夕な 乙女寒泉波む 筑紫の海ゆき 捧げ来る

いと疾きその船や 君よ召しませ

破れ老いし船 塩に焼き 豎琴作り 掻き弾くや

さやさやと 七里響む 枯野の琴よ ”

\*そのまま幕前の後景の影の場面となる。

昭和二十年の公彦の影の姿、しばらくそのまま、冬乃の影が現れる。

「豎琴」の流れるような音色。

冬乃声 あなたは焦土の日、わたしの姿を求めたが叶わず、焼け残った奉安殿を見て、虚しさの余り、石をもて打ち毀さんとした。その折それを見た軍事教官と諍いになり、重傷を負わせた。直後に姿を晦まし、近隣の国へ潜入しやがてその籍を得るも、五十の歳月を経て再びここへ戻ってきたのです。

公彦声 今の私にあるのは、枯野姫からいのちの水を戴いた時までのこと、それよりのことはすべて忘却の彼方へ去っていったのだ。

冬乃声 あの別れを惜しんだ折の夕映えの饗宴、二人のいのちが満たされた刻でありました。それ以上何を思い出すことがあろう。

公彦声 遙かな歳月も疾風のように駆け抜けていった。だが冬乃の心の琴線の音は、いつも聞こえていた。

冬乃声 大樹のもとに、立ち尽くしていたこの身。風の葉が走り去り、翳雲が流れ、日照り雨が過ぎていった。

公彦声 緑の大樹は戦の劫火から皆を守り、姫様から伝えられたいのちは、子供たちに転生した。生きるさまは目に映るものすべてに満ち満ちている。

冬乃声 いのちの寒泉は傷付いた人を潤し、心の鼓は風ぎ清和の音を奏でた。小さな草の実さえ、やがては風にそよぐ草穂の波になる。

公彦声 今はもう戦いの鼓も聞こえない。亡き戦友たち、そのいのちも残されたものたちに転生し、時の大河を悠々と流れている。

\*冬乃が土器を公彦に渡す。

冬乃声 平安の鼓が鳴っている、天に捧げた腕は思わなくとも良い。いのちの徴しを見せて、しっかりとその右腕で抱いて下さい。わたしたちの魂は相寄り、願いは叶えられる。

公彦声 眇々と木の間隠れに鳥が渡ってくる。この土器でいのちの水を供え、あどきに冬乃が希んだ豊かな翼、新たな世界へこの大樹から羽ばたいてゆこう。

\*二人が泉を汲み大樹に供える。

「鼓」がゆっくり鳴り、「豎琴」の流れるような音色が続く。

公彦と冬乃の並んだ影が、小さくなつてゆき、やがて大樹の洞の中に消えてゆく。

〈幕下りる〉